

島嶼・辺境 ポジティブに

ユーラシア大陸の東に位置する日本は、海で隣国と接する世界でも稀な国の一つである。本書は、これら島嶼域からなる日本の国境問題を整理し、島嶼・辺境を、いかにポジティブな地域へと導いていくかを考えている。国境、辺境、島嶼にまわりつく「呪縛」をいかに解くかが、本書のテーマだ。12名の執筆者による論考とエッセーからなる。編著者は『北方領土問題』(中公新書、2005年)で大佛次郎論壇賞も受賞した日本における国境問題のエキスパートである。

前半では、日本の国境問題や島嶼の概要とその制度を通覧し、島嶼のかかえる問題点が提起され、北方領土の問題解決試案についても触れられている。後半では、国境地域という地の利を生かした試みが、「国境イニシアチブ『辺境』からのまなざし」としてまとめられている。これらの試みの背景には、国境の理解のされかたが、「自国の権益を確保するための隣国との間の

『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』 岩下 明裕編著

線」という考えから、「隣国との協力関係において国民の利益を最大に引き出すための接面」という考えに変化していることがある。具体的には、台湾との交流を模索する与那国島、北方領土と向き合う根室市、韓国との交流をめざす対馬市、大洋に開かれた国境を有する小笠原の事例が紹介されている。これらの地域は、第2次世界大戦までは生活圏として人々が普通に行き来した地域であり、国境に位置することを利用して隣国との交流を定着させ、独自の発展を模索しようという地域でもある。

最後に、金成浩氏の「オキナワ・パブリック・ディプロマシー」は、沖縄にとって貴重な論考である。沖縄が文化などの「魅力」による「ソフト・パワー」を駆使し、広報や文化交流を通じて、他国(自国)の国民や世論に直接働きかける外交活動をせよという骨子であり、「ソフト・パワー」が米軍基地の撤廃につながっていくというものだ。島嶼・沖縄にとって頼もしい平和の武器である。

(町田宗博・琉球大学法文学部教授)

日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか 岩下明裕



スラバユウラシア国境 8

北海道大学出版会

北海道大学出版会・1680円

／いわした・あきひろ 北海道大学スラブ研究センター教授。専門分野はロシア外交、ロシアとアジアの国際関係。